

## コミュニケーションの為の可能形使用実態調査報告

### —日本語母語話者は、どのように可能形の使用を選んでいるのか—

瀬川 綾子<sup>i</sup>

#### 1. はじめに

本発表は、日本語非母語話者の可能形の非用によるコミュニケーション上のエラーが起こる原因を、母語話者の可能形の使用実態をもとに明らかにすることを目的としている。

(1) \*この仕事は難しいのですぐには覚えません。

新人のアルバイト(日本語非母語話者)がこのような発話をした時、これを聞いたアルバイト先の日本人(日本語母語話者)は、この発話に不自然さ、時に不快感を覚えるであろう。この「新人」の発話には文法的な間違いは何もないが、可能形の非用により母語話者にとっては非常に失礼な発話に感じられる。つまり、この発話には「コミュニケーション上の間違い」が生じており、時に学習者に大きな不利益を与えることにもなる。そして初級の学習者であれば日本語が未熟なせいだと捉えられ許されるのに対し、普段流暢に日本語を話している上級・超級話者になるほど、不自然さが不快感に変わる危険性が増していく。

では、日本語母語話者は可能形をどのような意識で使っているのでしょうか。その点を明らかにするため、日本語母語話者243名を対象に可能形の使用実態のアンケート調査を行った。その結果を分析(SPSSによる)した結果、日本語母語話者は可能形を使う際に様々な感情を含意させながら使っていることが明らかになった。そして、その使い方(可能形を使用するのか使用しないのか。また、肯定形を使うのか否定形を使うのか。)には一定の法則が見いだされた。

#### 2. 先行研究

##### 2.1 可能形

可能形の分類については、小矢野(1979)や渋谷(1995)で行われているように、次の3種類に分類し調査・分析対象とする。分類は渋谷(1995)による。

- (A)可能動詞 : 五段動詞から派生(読める/作れる/走れるなど)
- (B)助動詞ラレル : 一段・カ変動詞から派生(寝ラレル/起きラレル/来ラレルなど)
- (C)デキル : サ変動詞に対応(補充形)。ただし漢字一字に付いたスルやズル(愛スル・感ズル)などをのぞく

##### 2.2 日本語の文法化

日本語の文法化の中で、特に感情的な表現の文法化についてまとめる。

### 2.2.1 感情表現の文法化

日本語は、授受表現や受け身表現に代表されるように、文型に様々な感情を含意させる言語である。田窪は著書『視点と言語』（1977）のまえがきの中で、「日本語はこれらの表現（話し手と聞き手の関係調整に関わる語類（発表者注））は文法化されており、非常に使用頻度が高いのに対し、英語でこれらの表現に対応する形式は、副詞や挿入語句として現れる」と指摘している。

この事から日本語を正しく運用するためには、文法的な知識だけではなく、そこに潜む感情的な含意も合わせて学んでいく必要があると言えるのではないだろうか。

### 2.2.2 可能形の感情的含意

森田（1977）では、「可能の「られる」は、受け身や自発の「られる」と語源は共通で、双方意味的に深いかかわりがある。」と前置きし、「感覚や感情の陰影に富む、＜自発＞に近い心理的なく受け身＞が発達しているが、このような受動的で自発的な表現態度は、“自己の意思を超えた内なるもの、外なるものの支配によって、おのずとそのような状況が実現していく”という可能表現に相通じる。」と述べている。さらに「その動作の実現が他の因子によって自己（動作主体）へと与えられるのが＜可能＞である。」と続けている。そして、「自力で実現の道を開くのは＜可能＞ではない。他からの働きによっておのずから道が開かれるのが日本語の＜可能＞である。」と結論付けている。

また、渋谷（1993）は、「可能形の語用論的意味」を「話し手の期待」として、動作が話し手の期待するものである場合に、可能表現が成立すると述べており、次のような例文を挙げている。

- (2) 人は一生に一度いい人に出会うことができる。
- (3) \*人は一生に一度いやなやつに出会うことができる。

(3) が非文になる理由を「「ある動作が可能である」という時の「ある動作」とは、常に話し手が期待する（待ち望む）動作、より正確には、動作主体が期待している（待ち望んでいる）であろう話し手が考える動作でなければならない」とし、「命題内容が話し手の期待に反するものであると同時に」、「マイナス意志性をもつためである」としている。つまり話し手が期待する内容ではない(3)の例文で、可能形が出現することは、可能形の語用論的意味（＝話し手の期待）と言う観点からふさわしくないという事である。

これらの論に発表者は賛同する立場であるが、実際の使用実態についてなされた調査の報告は管見の限り見当たらない。

そこで、日本語母語話者を対象としたアンケートを行う事で、現実の使用実態を明らかにしたいと考えた。

## 3. 可能形の使用実態

### 3.1 アンケート調査

先行研究で述べられている可能形の感情表現の文法化は、実際の使用場面ではどのように表れているのかを調査する為のアンケートを行うことにした。調査対象は、日本語母語話者であり、日本語に職業として関わっていない日本人<sup>ii</sup>である。

### 3.2 アンケート概要

アンケートの設問は2つのパターンで行った。設問Ⅰは選択問題（一部記述あり）で、設問Ⅱは記述式とした。また、設問Ⅰは10問で、内可能形を問うものは6問、4問はダミー<sup>iii</sup>とした。調査期間10日間に234名より回答を回収。うち有効回答は、設問Ⅰで227名分、設問Ⅱで152名分であった。

以下に設問Ⅰの例題を示す。

例) A: 明日のパーティー。行きますか。  
B: 用事ができたので、(1、行けません 2、行けません)。・・・Q-1  
感情的なイメージ [ ある ・ ない ]・・・Q-2  
[ 1、面倒 2、焦り 3、言い訳 4、感謝 5、残念 6、その他 ( ) ]・・・Q-3

アンケートは、まず一つの例文に対しその例文で可能形を使うか使わないかを問うた。(Q-1 アンケート例参照。尚、実際のアンケートにはこの記号は付していない。以下同) 次に、その例文に何らかの感情的なイメージを感じるかどうか、「ある」または「ない」の二者択一で答えてもらった。(Q-2) そして、「感情的なイメージがある」と答えた場合、それがどんな感情であるかを五者択一で答えてもらった。さらに選択肢の中に該当する答えがない場合に配慮して、自由記述での回答もできるようにした。(Q-3 (6、その他))

### 3.3 アンケート結果

アンケートの結果は、ダミー問題を除く可能形についての6問をSPSSによる $\chi^2$ 検定で分析した。

まず、Q-1では、すべての設問において可能形を選ぶ傾向が1%水準で有意であるという結果を得た。また、可能形を使うことで何らかの感情を表現しようとしているという傾向も見られ(Q-2)、その可能形に感情的な含意を感じて使っていることが1%水準で有意であることが示された。

Q-1、Q-2の分析により、可能形を使うことで、そこに何らかの感情的な含意を感じているという結果が得られたので、次にその含意がどんな種類のものであるかについての分析を行った。(Q-3の分析) また、この含意に関しては一定の方向でグループとしてまとめられる傾向が見られた。そのグループは「喜び・嬉しさ・安心」「残念・困惑」「焦り・心配」「気遣い」である。

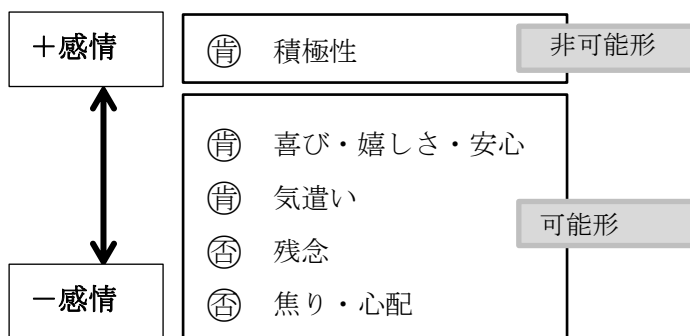


図1 感情の種類とその表現形式

#### 4. 非母語話者の使用実態

今回のこの調査を受け、N1 取得レベルであり超級・上級レベルのクラスに所属する学習者 10 名（中国人 5 名、韓国人 4 名、ベトナム人 1 名）に協力を依頼し、非母語話者の可能形の使用についての調査を行った。使用した調査票は、日本語母語話者に行ったアンケートで使用した例文をそのまま使用した。（一部形式に変更あり）

調査の結果、可能形の使用は、個人でかなりの差が出た。その中で可能形を比較的使用している学習者に、可能形使用の意図を問うためのインタビューを行った。その結果、可能形を使用しているにもかかわらず、その使用意図は「できるかどうかを考えた」と言う単純に可能形の本来の意味としての機能のみで選択しているにすぎないという結果が得られた。

例) A: 仕事終わったんですか。  
B: はい、今日は久しぶりに早く帰れます。

この場合、多くの日本語母語話者は、早く帰れることに対する喜びを表現するため可能形を使っているのに対し、非母語話者（中国、学習歴 3 年）は、「仕事が終わった→今日はもうすることがない→だから帰ることが可能である」と言う心の流れで可能形を使用していた。また、別の中国人学習者（学習歴 3 年）は、上記の例文において可能形を選択していたが、その理由として「今日だけであることを強調したい」と答えた。

#### 5. 終わりに

外国語を学習するうえで、その微妙なニュアンスを伝えることは難しく、誤解を与え不利益を受けることも珍しいことではない。それを回避する術すべてを授業の中で行っていくことは不可能であるが、受け身表現・授受表現などの項目同様、可能形についてもその配慮がなされた指導が行われるべきではないかと強く感じた。今後、より効果的な指導法を模索し、教材作成を行っていくことを次の課題としたい。

##### 【参考文献】

小矢野哲夫（1979）．「現代日本語可能表現の意味と用法」『大阪外国語大学学報』83 - 98

渋谷勝己（1993）．「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』i - 262

\_\_\_\_\_（1995）．「可能動詞とスルコトガデキル」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』111 - 120  
くろしお出版

田窪行則（1977）．『視点と言語行動』iv くろしお出版

<sup>i</sup> ajagon@gmail.com

<sup>ii</sup> 日本語に職業として関わっていない日本人とは、日本語教師や日本語研究社を指している。日本語を使う職業である、新聞記者や翻訳・通訳者は対象としている。

<sup>iii</sup> 可能形の調査だと気付かれたいための措置である。